

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 12日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520735

研究課題名（和文）

中世フランスにおける「国家史」叙述の生成・変容過程に関する研究

研究課題名（英文）

Formation and Transformation of National History Writing in Medieval France

研究代表者

鈴木 道也（SUZUKI MICHIIYA）

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：50292636

研究成果の概要（和文）：13世紀フランスにおいて初期「国家史」として成立する俗語年代記『王の物語(Roman des Roys)』は、歴史を語るその叙述スタイルにおいて、先行する「教会史」に典型的なキリスト教的(あるいはユダヤ教的)歴史叙述の伝統を継承する部分も多いことが確認された。他方、論理実証主義のもと一定の様式を生み出してきた近代以降の歴史叙述を先取りする客観的歴史記述に向けた試みも認められた。現代の歴史家も中世の歴史家も、その立場や時代の違いを超えて、「詩的真実」と「歴史的事実」をいかに調和させて読者に「政治的真実」を提示するかという難題を抱えており、叙述スタイルには共通するところも多いように思われる。また王の命を受けて、当時まだ「王の言葉」ではなかった俗語フランス語を用いて普遍年代記の枠組みのなかで王朝史を軸に独自の記述を加えていったサン=ドニ修道院の活動は、第一には、先進的に俗語を用いていた北フランス中小諸侯・諸都市と王権との関係性のなかで理解されるべきであり、第二には、史書編纂が必ずしも活発とはいえない状況のなか、カペー期からヴァロワ期へと続く活動の一貫性・継続性という点において評価されるべきであろう。

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	800,000	240,000	1040,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：ヨーロッパ中世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：歴史叙述、フランス、年代記、写本、ナショナル・アイデンティティ、国家史

1. 研究開始当初の背景

(1)歴史叙述研究の隆盛：客観的歴史認識の可能性に対して疑問を呈する「言語論的転回」論、あるいは歴史の記録は出来事それ自体ではなく、事後的に獲得された意味を通して行われるとする「物語り」論などを受けて、歴史学は方法論的な再検討を余儀なくされている。そうしたなかで、歴史を構成する

様々な主体が紡ぎ出す無数の歴史、つまりアイデンティティの関係性を明らかにする手がかりとして、近年関心を集めているのか叙述史料研究である。中世ヨーロッパ史に関していえば、例えば1996年にユトレヒトで開催された「中世年代記に関する国際会議」は、その後も3年ごとに集会を重ねており(最新の論集としては、KOOPER Erik (ed.), The Medieval Chronicle V, Amsterdam/New

York, 2008)、2009年にはこれまでの成果を集大成した中世年代記事典を刊行した。(DUNPHY Graeme(ed.), Encyclopedia of the Medieval Chronicle, Leiden)。また中国史やイスラーム史あるいは日本史でも、史書を中心とした叙述史料研究は「歴史叙述のあり方の考察を通して、学問としての歴史学がいかんして形成され発達されたかを跡づけ解明する」可能性を持つとして注目されている。

(2)前近代の「ネーション」研究：従来のナショナリズム論の多くは、前近代史の分析に際して、いわゆる「近代主義か原初主義か」といった対立の構図をとるにせよ、あるいは「近代主義」に「原初主義」を接合させるような形をとるにせよ、つねに近代の側に研究の軸足を置いていた。しかし近年、中世研究の側から中世におけるエスニック集団の形成、変容過程を内在的に理解しようとする試みが現れている。こうした試みがいわゆる「イギリス史」や「フランス史」といった共同体のカテゴリーに関する伝統的な枠組みを前提にすることなく、さらに時として精神的意識的な領域に関心を集中させる傾向にある「ネーション」研究が、王権を核とする王国行政の制度的整備などに代表される実態的な部分との関係性を意識して進められるとき、そこからは多層的なアイデンティティのなかでの「ナショナル」なアイデンティティの位置づけに関して、豊かな成果が生み出されるのではないかと期待される。

2. 研究の目的

本研究は、多様な歴史認識が交錯する中世社会にあって、(1)権力体としての国家の成長と変容が「歴史家」たちの語りをどう変えたのか、また(2)歴史叙述に携わる当時の知的エリートたちは、どのような意識と方法論をもってそれぞれの史書を組み立てていたのか、以上2点の解明を目指すものである。

3. 研究の方法

(1)中世の歴史家との対話：前近代に限らず、歴史叙述と権力との関係は今日的な問題でもある。歴史家は権力によってお墨付きを得、歴史叙述の生命力は権力の強度に左右される一方、権力は歴史家の語りによって正統性を証し、その権能を強化している(ルイ・マラン[渡辺香根夫訳]『王の肖像 権力と表象の歴史的哲学的考察』法政大学出版局、2002年)。現代の歴史家は、きわめて多様な表現メディアを手に入れ一方で、歴史学の「社会的有用性」が問われるなか、自らの語りの持つ意味について、権力との関係を意識しつつ、あたためて見つめ直すことを迫られてい

る。本研究が対象とする様々な史書を記した中世の歴史家たちは、間違いなく中世を代表する知的エリートであり、希少性と可変性を特性とする写本メディアを駆使して、新しい秩序編成の在り方について積極的な主張を展開していた。こうした歴史家の叙述行為を分析することで、現代の歴史学の方向性についても示唆を得ることか出来ると思われる。

(2)情報科学的手法の導入：史書分析に際しては、内容と構成の両面からの検討が可能であるが、テキスト分析に関しては、すでに情報科学の領域で様々な手法が開発されつつあり、具体的な作業に際しては、テキスト・マイニングやオントロジー研究あるいは系統文献学など、情報科学の最新の成果も積極的に取り入れたい。

(3)比較史的研究の試み：本研究では、中世歴史叙述の比較史的研究を試みたい。対象はイスラーム、中国そして日本の史書であり、その際比較の視座としては、1 権力主体と歴史の語り手との距離、2 歴史叙述の国家性(国家史の位置づけ)、3 史書の生命力<編纂・発信・競合・受容・普及・再編諸過程の比較>、を考えている。

4. 研究成果

2009年度は、最近フランスで出版された二つの論集(『詩的眞実と政治的眞実』と『年代記の詩学』)が、中世の歴史叙述を政治的な詩作と捉える視点に立っていることを手がかりに、歴史学における文献学的研究の成果と近年の文学理論を融合させることをめざして、13世紀後半にフランス王国で成立した俗語版王国年代記を分析した。その結果、論文「中世王国年代記に現れた「政治的眞実」-最近の研究から-」において、初期「国家史」としての『王の物語』は、歴史を語るその叙述スタイルにおいて、先行する「教会史」に典型的なキリスト教的(あるいはユダヤ教的)歴史叙述の伝統を継承する部分も多いことが確認された。

また他方で、論理実証主義のもとで一定の様式を生み出してきた近代以降の歴史叙述をすでに先取りする客観的歴史記述への試みも、そこには認められた。このことは、歴史叙述全般を対象に「歴史は何をどう記してきたのか」、あるいは「歴史は何を記すべきか/記すべきでないのか」という問いを投げかける、近年のいわゆる「物語り論」の構想に対しても、中世王国年代記の分析作業が一定の意味を持ちうることを示している。現代の歴史家も中世の歴史家も、その立場や時代の違いを超えて、「詩的眞実」と「歴史的事実」をいかに調和させて読者に「政治的眞実」を提示するか、という難題を抱えており、実

際その叙述スタイルには共通するところも多いうように思われる。

2010年度は、中世の歴史家が用いた言葉、すなわち歴史記述における言語選択(ラテン語か俗語か)の問題を取り上げ、俗語フランス語の発展期とされる13世紀後半から14世紀前半にかけてのフランス王国で記された史書を分析の対象とした。歴史記述は時として読者(受容者)の意向を無視し、プロパガンダ的に言語を選択、発信することもあるため、当該期における全般的な言語使用状況との比較を意識して、法実務の領域における言語使用についても確認することとした。通説的には、王権による俗語フランス語使用が、その支配圏における俗語の浸透に貢献したとされてきた。しかし検討の結果、法実務の場にあっても、また歴史記述においても、王権の拡大とフランス語の浸透は一致していなかった。両者は一体的ではなく、それぞれ独自の展開(成長、拡大、衰退)を見せている。

俗語としてのフランス語は、様々な地域的偏差を含んだまま、漸次的に普及しており、各地でコミュニケーション言語としての機能を強化していくなかでその影響力を拡大させていた。王権によるフランス語の活用は、むしろそうした状況に突き動かされる形で進んでいったと考えられる。

したがって、『王の物語』に象徴される、歴史叙述における俗語使用の意味についても、通説的理解とはやや異なった観点から考えてみる必要があるように思われる。王の命を受け、当時まだ「王の言葉」ではなかった俗語フランス語を用いて、普遍年代記の枠組みのなかで王朝史を軸に独自の記述を加えていったサン=ドニ修道院の活動は、第一には、先進的に俗語を用いていた北フランス中小諸侯・諸都市と王権との関係性のなかで理解されるべきであり、第二には、史書編纂が必ずしも活発とはいえない状況のなかで、カペー期からヴァロワ期へと続くその一貫性・継続性において評価されるべきであろう。

中世フランス王国では、「王の言葉」に位置づけられた俗語フランス語が13世紀後半以降広く王国内に浸透・定着したとされてきた。権力の言語的表象として機能する歴史記述でも同時期に俗語散文体の存在が知られており、従来の研究史は、政治エリートにおけるリテラシーの向上や文字記録への信頼性の高まりを前提に、現状を正当化(あるいは批判)する手段として人々は「書かれた過去」に注目するようになった、と理解してきた。ここには、二重言語構造が変質しつつある状況のなか新たな読者層に向け王権近くで俗語史書を粛々と編纂する歴史家の姿を想像することができる。しかし最近の研究は、14世紀前半にかけてフランス王国内で作ら

れた史書の多くは内容の如何を問わずラテン語であり、その優位は揺るがないことを確認している。こうした指摘を踏まえれば、この時期の俗語史書が担っていた象徴性、あるいはその具体的機能を伝統的な枠組みのなかで理解することはもはや困難であるように思われる。

そこで2011年度の研究では、フランス語の発展期とされてきた13世紀後半から14世紀前半にかけて王国内で制作された複数の俗語史書をとりあげ、語彙も綴りも異なる方言的変種をいくつも抱える俗語フランス語のなかからひとつを選び、過去のラテン語史書の翻訳あるいはそれへの加筆という形で俗語版を作り上げていった歴史家たちの、俗語利用の思想と方法について考察した。結果としてカペー朝期の『王の物語』からヴァロワ朝期の『歴史の鑑』俗語版まで、この時期の俗語史書編纂事業は必ずしも活発とはいえないが、歴史家たちは読者(受容者)の意向を踏まえつつ、また俗語の可能性を慎重に探りながら、ラテン語史書に記された普遍史的世界観を「フランス史」に置き換えていたことが明らかとなった。従来語られてきた「フランス語の勝利」は、歴史記述の現場では比較的長期に及ぶ試行期を必要としていたと思われる。

2012年度は、ヨーロッパにおける「知の歴史」の系譜を辿る上で重要な位置を占めるヴァンサン=ド=ボーヴェ編著『大いなる鑑(Speculum Maius)』の構造分析を進めていく上で、デジタル化されたテキスト・データベースがどのような応用可能性を持つのかという点について、研究史の整理と分析ツールの検討を行った。

検討の結果明らかになったのは、以下の諸点である。1. ナンシー大学の「ヴァンサン=ド=ボーヴェ研究会」が進めている〈Sourcencyme〉プロジェクトは、『大いなる鑑』を始めとする中世百科全書テキストのTEIコーパス作成プロジェクトであり、このデータベースの活用により、百科全書作者たちの引用の具体相の解明、そして中世の知的エリートたちによる知的財産継承様態の解明につながる可能性があること。2. オーストラリアのモナシュ大学が開発した「剽窃検出プログラム」〈Damocles〉は、中世百科全書における他著作からの引用箇所を検出、引用傾向の分析に有効であり、上記〈Sourcencyme〉プロジェクトが構築するデータベースの分析ツールとしての活用が期待されること。こうした作業と並行して、7月末から8月末にかけてパチカン図書室およびフランス国立図書館において史料収集を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1 鈴木道也「ヴァンサン=ド=ボーヴェ編著『大いなる鑑(Speculum Maius)』の構造分析におけるテキスト・データベースの活用 -現状と課題-」『ヨーロッパ文化史研究』14号、5-27頁(2013)。[査読あり]

2 鈴木道也「歴史資料デジタル化の現状 中世フランス史の場合」『ヨーロッパ・グローバル化と諸文化圏の変容 研究プロジェクト報告書』(東北学院大学オープン・リサーチ・センター) (2012)。

3 Michiya SUZUKI, Vernacular chronicles in medieval France (from 13th to 14th century), Proceedings of the 6th conference of the Medieval Chronicle Society (Pecs, 25-30, July, 2011), 2011, pp. 23~26. [査読あり]

4 鈴木道也「ヨーロッパにおける中世的自然観の解明に向けて:中世百科全書を手がかりに」『埼玉大学紀要・教育学部』59巻2号、101-118頁(2010)。

5 鈴木道也「中世王国年代記に現れた「政治的眞実」-最近の研究から-」『埼玉大学紀要教育学部』59巻1号、117-130頁(2010)。

[学会発表] (計3件)

1 鈴木道也「歴史資料デジタル化の現状 -中世フランス史の場合-」(2011年12月10日) 東北学院大学オープン・リサーチ・センター (東北学院大学)

2 鈴木道也「中世後期フランス王国における歴史記述と俗語」(2011年11月6日) 史学会 (東京大学)

3 Michiya SUZUKI, Vernacular chronicles in medieval France (from 13th to 14th century) Medieval Chronicle Society (2011年7月25日) .

[その他]

1 鈴木道也「書評 轟木広太郎『戦うことと裁くこと: 中世フランスの紛争・権力・眞理』」『史林』(史学研究会) 94巻6号、92-97頁(2011年)。

2 鈴木道也「書評 青谷秀紀『記憶のなかのベルギー中世 -歴史叙述にみる領邦アイデンティティの生成-』」『西洋史学論集』(九州西洋史学会) 49号、115-120頁(2011年)。

3 鈴木道也「中世ヨーロッパにおける歴史叙述の多層性に関する研究-『歴史の鑑』の史料論的分析を中心に-」『埼玉大学総合研究機構 総合研究機構研究プロジェクト研究成果報告書』第8号、14-15頁(2010)。

4 鈴木道也「中世ヨーロッパにおける歴史叙述のアイデンティティ形成力に関する研究」『埼玉大学総合研究機構 総合研究機構研究プロジェクト研究成果報告書』第7号、37-38頁(2009)。

5 鈴木道也「書評 Yoshiki Morimoto, *Etudes sur l'economie rurale du haut Moyen Age: historiographie, regime domanial, polyptyques carolingiens*」『西洋史研究』(西洋史研究会)、新輯38号、131-141頁(2009)。

6 鈴木道也「書評 渡辺節夫編『王の表象-文学と歴史-日本と西洋』」『西洋史学』(日本西洋史学会) 233号、73-75頁(2009)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 道也 (SUZUKI MICHIIYA)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 59292636

(2) 研究分担者: なし

(3) 連携研究者: なし